

大学生の恋愛における問題状況の構造的枠組みの構築¹⁾

相羽美幸*

Establishment of a Structural Framework for Problematic Situations in Romantic Relationships of University Students

Miyuki AIBA

This study identified problematic situations in romantic love by both experience and degree to be troubled or worried, and constructed a structural framework for problematic situations in romantic relationships of Japanese adolescents. Five-hundred-two undergraduates responded to a questionnaire about problematic situations, dating experiences, and the number of boyfriends/girlfriends in the past. The results showed that three situations at development stage; "presence of a romantic rival", "approach from a person you don't like", and "approach from oneself", four situations at maintenance stage; "anxiety for future relationship", "excessive control by your lover", "difference in value", and "inability to support your lover", and three situations at breakup stage; "regret behavior of ex-lover", "broach the subject of breakup", and "broken heart" were identified. In all situations, degrees to be troubled or worried were significantly higher than "slightly troubled or worried", or experience rates were more than 50%. Principal component analysis revealed that problematic situations in romantic love were classified three groups (active approach, maintenance of relationship, negative behavior by other).

key words: romantic relationships, problematic situations, romantic love

問 題

恋愛は、青年にとって非常に重要で身近な対人関係の一つである。そのため、多くの青年が恋愛に興味を持ち、恋愛がうまくいかないことで悩むこともある。日常生活での些細な悩みだけでなく、最近では、デートDV (Dating Violence) やストーカーなどの被害、別れ話のもつれによる殺傷事件といった深刻な事態も増加しており (内閣府男女共同参画局, 2008)、恋愛関係で生じる様々な問題が広がりつつある。一方、恋愛関係で悩み傷つくことは、負の側面だけでなく、その後の人生に肯定的変化を生じさ

せることも明らかになっている (神菌, 1998)。例えば、失恋の直後には精神的健康が低下するが、立ち直り過程を経ることで肯定的な心理的变化が生じること (石本・今川, 2001, 2003) や、失恋経験がその後の社会的スキルの向上に影響を及ぼすこと (堀毛, 1994) が明らかになっている。また、Erikson (1950) は、青年期の恋愛を、拡散した自我像を相手に投射することにより、自己の同一性を定義づけようとする努力であると捉え、青年期における恋愛関係の自我発達の意義を指摘している。このように、恋愛関係で悩みを抱えることは、青年の自己成長的観点からも重要な意味を持つ。したがって、恋

¹⁾ 本論文は、2010年度筑波大学大学院人間総合科学研究科博士論文として提出された論文の一部を、加筆修正したものである。また、本論文の一部は2007年日本心理学会第71回大会において発表された。本論文の執筆にあたり、ご指導いただいた松井 豊教授 (筑波大学)、データ収集にご協力いただいた外山みどり教授 (学習院大学)、岡田 努教授 (金沢大学)、畑中美穂准教授 (名城大学)、日比野桂准教授 (高知大学) に、心より感謝申し上げます。

* 東洋学園大学人間科学部

Toyo Gakuen University, Faculty of Human Sciences, 1-26-3 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan

愛関係の悩みを経験しないようにするのではなく、恋愛関係の悩みを直面した時にどのように解決するかが、青年にとって重要な課題となってくると考えられる。さらに、それらの悩みを解決する能力を身に着けることで、デートDVやストーカーといった問題の深刻化を防ぐことにも繋がり得るであろう。

青年の恋愛に対する関心の高さを反映するように、これまで、青年向けの雑誌やテレビなどの様々なメディアで、恋愛に関する情報が多く提供されてきた。特に、青年を対象にした雑誌では、恋愛や性に関する記事が非常に多く掲載されている（谷本，1998）。相羽（2009）は、雑誌とホームページを対象に、扱われている恋愛記事の内容分析を行った結果、以下の点を明らかにした。第一に、雑誌やホームページでは、交際前に関する記述がほとんどであり、交際中や別れ・交際後に関する記述は非常に少なかった。第二に、交際前では、デートや告白などのアプローチに関する記述が多く、交際中では性に関する記述が多かった。第三に、雑誌とホームページともに、科学的根拠の不明瞭な経験論に基づいた内容が掲載されていた。これらの結果から、相羽（2009）は、多くの青年が依拠している雑誌やホームページの情報が現実の青年の恋愛を反映していない可能性と、これらの情報を鵜呑みにすることの危険性を指摘している。

一方、これまでの恋愛に関する心理学的研究を概観すると、主に恋愛関係の肯定的側面に焦点が当てられており、恋愛関係の悩みなどの否定的側面に関する研究は少なかった（立脇・松井・比嘉，2005）。立脇他（2005）によれば、恋愛関係の否定的側面のうち、これまで比較的多く検討されてきたのは、恋愛関係の崩壊・失恋（飛田，1998；加藤，2005；山下・坂田，2008）に伴う感情や対処行動である。また、否定的感情のうち、嫉妬（Buss, Larsen, Westen, & Semmelroth, 1992; Pines & Friedman, 1998; 坪田，1998）も研究蓄積が進んでいる。これらの否定的側面を扱った研究では、個々の事象が個別に検討されており、恋愛関係で生じる様々な悩みを包括的に扱った研究は行われてこなかった。しかし、青年がメディアの誤った情報を鵜呑みにして恋愛関係での悩みやトラブルが深刻化する危険性を阻止するためにも、現実には青年が恋愛関係で抱えている様々な悩みを明らかにすることは、重要な課題であると考え

られる。

このような現状をふまえ、相羽（2011）は、青年が恋愛関係の構築や維持や終結において困ったり悩んだりする状況を「恋愛における問題状況」と定義し、面接調査と質問紙調査を用いて、大学生の恋愛における問題状況を探索的に収集した。その結果、交際前では「自分からのアプローチ」「恋愛対象外の相手からのアプローチ」の2つの問題状況が、交際中では「相手への支援のできなさ」「関係に対する不安感」「相手の過干渉」「自分の過失に対する相手の否定的反応」の4つの問題状況が、別れ・交際後では「別れたくない相手との別れ」「別れの切り出し」の2つの問題状況が、それぞれ抽出された。そして、特に交際中や別れ・交際後における交際相手との関係性に関する問題が、大学生にとって深刻な悩みとなっていた。

相羽（2011）では、恋愛における問題状況で困ったり悩んだりする程度のみを測定していたが、大学生の恋愛における問題状況を詳細に検討するためには、問題状況の経験の有無も測定する必要があると考えられる。すなわち、困ったり悩んだりする程度が高くても、ほとんどの大学生が経験しないような状況であれば、その問題状況は一般性が低いと判断される。逆に、困ったり悩んだりする程度が中程度であっても、多くの大学生が経験している状況であれば、その問題状況は一般性が高く、多くの大学生に共通した悩みであると捉えられる。また、問題状況の経験率を明らかにすることで、雑誌やホームページの情報と現実の大学生の恋愛とを比較するうえでも有益なデータになると考えられる。そこで本研究では、大学生の恋愛における問題状況を経験の有無と困ったり悩んだりする程度の2側面から測定し、大学生にとって問題性の高い状況を特定することを第一の目的とする。

また、相羽（2011）では問題状況を測定する尺度のうち、複数の下位尺度において内的一貫性が低いという問題点が見られたため、問題状況を測定する尺度の項目を追加・修正し、問題状況を精錬する。さらに、相羽（2009）の雑誌とホームページで扱われていた問題状況を加え、雑誌やホームページの情報と現実の青年の恋愛との相違を検証する。メディアの提示する情報と実際の青年のデータを比較し、その相違を明らかにすることで、メディアの情報を

鵜呑みにすることの危険性について、実証的根拠をもとに警鐘を鳴らすことが可能となる。また、恋愛という青年の興味関心の高いテーマであるため、本研究は青年のメディアリテラシー教育においても役立つと考えられる。

次に、本研究の第二の目的として、目的1で特定された問題状況の全体的構造を明らかにし、恋愛における問題状況の枠組みを構築する。この枠組みを設定することで、これまで個別に研究されてきた恋愛関係の否定的事象の位置づけを明確にすることができるであろう。また、様々な問題状況を枠組みによって整理することで、青年自身が現在抱えている恋愛の悩みや苦手とする状況を把握しやすくなることが期待できる。

さらに本研究では、問題状況の構造的枠組みの特徴を明らかにするために、恋愛における問題状況の性差や交際人数との関連を検討する。

これまで、恋愛に関する心理学的研究では、性別は重要な要因として捉えられてきた。例えば、恋愛行動の経験率では、嫌な人から交際をせまられた経験（高比良，1998）や別れの切り出し（大坊，1990；牧野・井原，2004）は女性のほうが多く、デートDVの被害者の約80%が女性であった（内閣府男女共同参画局，2008）。一方、自分からの告白（石川，1994）や浮気した人数（牧野，2012）は男性のほうが多いという結果が得られている。恋愛で生じる否定的感情では、女性のほうが、交際中の関係不安や親和不満感情（「寂しい」「不安」など相手への親和・愛着欲求が満たされないために生じる感情）を抱きやすいこと（高坂，2009；立脇，2005）や関係崩壊によって傷つきやすいこと（Smith & Cohen，1993）などが明らかになっている。これらの結果から、告白などのアプローチは男性が多く経験し、相手からのアプローチに対する受身的な悩みは女性が多く経験しているとまとめられる。また、女性は男性の浮気などを心配して、交際中の関係性について不安になり悩む程度が高く、最終的に別れを切り出すことが多いと推測される。

性差と同様に、これまでに交際した恋人の人数によっても、恋愛に関する悩みの捉え方が異なる可能性が考えられる。堀毛（1994）は、恋愛関係の進展や失恋に伴い社会的スキルが向上することを示唆している。すなわち、交際経験が増えることで恋愛の

様々な悩みに直面する機会が増え、その解決策を見つけ出し克服することで、困ったり悩んだりする程度が減少する可能性が考えられる。その一方で、交際経験が増えても、解決策がなかなか見つけられない、もしくは実行できないなどの理由で、困ったり悩んだりする程度が減少しない問題状況も存在する可能性があるろう。

以上をふまえ、本研究は、経験の有無と困ったり悩んだりする程度の2側面から、大学生の恋愛における問題状況を特定し、恋愛における問題状況の構造的枠組みを構築することを目的とする。

方 法

調査方法

集団配布集団回収による無記名・個別記入方式の質問紙調査を実施した。実施時間は15分程度であった。

調査対象者

関東・四国・北陸の国立・私立大学の学生502名に調査を実施した。このうち、回答が全体の項目の半分以下であった回答者および明らかに回答に虚偽があると判断された14名の回答者を除き、488名（男性206名、女性263名、不明19名²⁾）を有効回答者とした。有効回答者の平均年齢は19.76歳（SD=1.44）であった。

調査項目

1. 恋愛における問題状況：相羽（2011）の質問紙調査から得られた問題状況の8側面に、相羽（2009）の内容分析から得られた4側面を加え、恋愛における問題状況尺度を作成した。交際前は「自分からのアプローチ」「恋愛対象外の相手からのアプローチ」「ライバルの存在」の3側面、交際中は「相手への支援のできなさ」「関係に対する不安感」「相手の過干渉」「自分の過失に対する相手の否定的反応」「性的な問題」「価値観のずれ」の6側面、別れ・交際は「別れたくない相手との別れ」「別れの切り出し」「相手の未練行動」の3側面であった。各尺度5～6項目となるように項目を作成した結果、交際前の問題状況15項目、交際中の問題状況30項目、別れ・交際後の問題状況16項目、全体で61項目と

²⁾ 性別不明のデータは、性別以外の項目には不備が見られなかったため、本研究では有効回答とみなした。

なった。各項目に対して、各項目に対して「(a) あなたは以下のような状況を体験したことがありますか」という教示文を提示し、「ある」「ない」の2件法で回答を求めた。さらに、(a) で「ある」と回答した項目については、「(b) あなたがその状況におかれた時、どの程度困ったり悩んだりしましたか」という教示文を提示し、(a) で「ない」と回答した項目については、「(b) もしあなたがその状況におかれたとしたら、どの程度困ったり悩んだりすると思いますか」という教示文を提示した。(b) の教示に対して、「1. 全く困らない・悩まない」「2. あまり困らない・悩まない」「3. やや困る・悩む」「4. かなり困る・悩む」「5. 非常に困る・悩む」の5件法で回答を求めた。本研究では、問題性の高い状況を特定するにあたり、大学生の経験率が50%以上もしくはは困ったり悩んだりする程度が「3. やや困る・悩む」よりも有意に高いことを問題性の高さの判断基準とした。

2. 交際経験と交際人数：交際経験の有無について、「今までに異性と交際したことがありますか」という教示文を提示し、「ある」「ない」の2件法で回答を求めた。「ある」と回答した対象者には、今までに交際した相手の人数について、「1人」「2~3人」「4~5人」「6人以上」の選択肢で回答を求めた。

結 果

尺度構成

恋愛における問題状況で困ったり悩んだりする程度に対して、交際前、交際中、別れ・交際後ごとに、因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った³⁾。因子数の決定基準は固有値1以上とした。単純構造が得られるよう、因子負荷量が.40以下であった項目と、複数因子に.40以上の負荷を示した項目と、.40以上の負荷を示す項目が2項目

³⁾ 各項目に関して、経験のある人は回顧法で、経験のない人は想定法で回答を求めているため、経験の有無によって因子構造が異なる可能性が考えられる。しかし、各項目における経験の有無別に因子分析を行うことは不可能なため、交際経験のある人となない人でそれぞれ交際中と別れ・交際後の問題状況について因子分析を行った。その結果、両者ではほぼ同じ因子構造が得られたため、経験がある人となない人の回答を合わせて因子分析を行うことは妥当であると判断した。

以下であった因子を構成する項目とを削除し、再度因子分析を行った。その結果、交際前では「ライバルの存在」「恋愛対象外の相手からのアプローチ」「自分からのアプローチ」の3因子、交際中では「関係継続に対する不安感」「相手の過干渉」「性的な問題」「相手への支援のできなさ」「価値観のずれ」の5因子、別れ・交際後では「相手の未練行動」「別れの切り出し」「失恋」の3因子が抽出された(Tables 1~3)。この結果をもとに確認的因子分析を行った結果、交際前(GFI=.92, AGFI=.89, CFI=.92, RMSEA=.06)、交際中(GFI=.89, AGFI=.86, CFI=.92, RMSEA=.05)、別れ・交際後(GFI=.94, AGFI=.91, CFI=.96, RMSEA=.05)のいずれにおいても適合度指標はおおむね良好であったため、因子構造の妥当性が示されたと判断した。各因子の α 係数を算出した結果、 α =.73~.86となり、おおむね十分な内的一貫性が確認された。

各項目の得点を因子ごとに加算して項目数で割ったものを尺度得点とし、各尺度得点の平均値と各尺度の経験率の平均値とを算出した(Table 4)。ただし、交際中と別れ・交際後の問題状況の経験率を算出する際には、交際経験のある回答者356名の結果のみを用いた。

問題性の高い状況を特定するために、各問題状況で困ったり悩んだりする程度の平均値と「3. やや困る・悩む」の3点との差の検定を行った(Table 4)。その結果、交際前では3状況すべて、交際中では5状況中3つ、別れ・交際後では3状況すべてにおいて、困ったり悩んだりする程度の平均値が3点よりも有意に高かった。困ったり悩んだりする程度が最も高かった問題状況は、「相手への支援のできなさ」であり、次に高かったのは「失恋」であった。

経験率については、交際前の3状況中1つ、交際中の5状況中3つでは50%よりも高かったが、別れ・交際後では3状況中すべての平均値が50%よりも低かった。経験率が最も高かった問題状況は、「自分からのアプローチ」であり、次に高かったのは「関係継続に対する不安感」であった。

困ったり悩んだりする程度の平均値が3点と有意な差が見られなかった問題状況のうち、「価値観のずれ」は、経験率が50%を超えており、因子に含まれる項目のうち、「4. 自分と相手の考え方が異なる」は交際前や別れ・交際後を含むすべての項目の

Table 1 交際前の問題状況の因子分析結果 (主因子法, プロマックス回転)

	F1	F2	F3	平均	経験率 (%)
F1 ライバルの存在 ($\alpha=.82$)					
8. 自分が好意を持っている相手に、恋人がいる	.93	-.13	-.14	3.56	49.69
11. 自分が好意を持っている相手が、自分の友人と交際している	.81	.13	-.21	3.35	23.85
2. 自分が好意を持っている相手が、他の人に好意を持っている	.63	-.19	.20	3.81	77.96
5. 友人と同じ異性を好きになってしまった	.47	.21	.08	3.62	39.17
12. 自分以外にも、その相手に好意を持っている人が、たくさんいる	.47	.23	.04	3.22	54.17
F2 恋愛対象外の相手からのアプローチ ($\alpha=.73$)					
9. 交際していない異性に恋人のようなふるまいをされる	.26	.62	-.24	3.36	41.67
13. 仲の良い異性から告白された時に、友達のままでいられるように、どう断るか考える	-.03	.61	.17	3.53	49.69
6. 好意のない異性から遊びに誘われた時に断ろうとする	-.17	.61	.05	2.83	68.40
14. 恋愛対象として意識していない相手から告白され、交際を断っても、しつこく交際を求められる	.01	.54	.01	3.81	26.61
15. 恋愛対象として意識していない相手から告白され、交際するかどうか考える	-.04	.47	.16	3.13	49.58
F3 自分からのアプローチ ($\alpha=.75$)					
1. 好意のある異性と二人で会っている時に、相手が話しやすい話題を探す	-.20	-.03	.61	2.88	84.91
7. どのタイミングで告白を切り出すかを考える	.33	-.11	.59	3.76	63.96
4. 告白をしようと思うが、相手が自分を好きかどうかかわからない	.17	.08	.58	3.89	69.44
3. 好意のある異性と二人で会った後、また次に会う約束をする	-.12	.15	.51	2.48	65.42
10. 告白した後、相手と気まづくなったらどうしようと考えている	.26	.11	.47	3.76	69.44
因子間相関					
	F2	.66	—		
	F3	.60	.52	—	

$n=322$

中で最も経験率が高く (86.44%), 「8. 自分と相手の物事の理解の仕方が異なる」も3番目に経験率が高かった (81.30%)。また、「価値観のずれ」において困ったり悩んだりする程度の平均値と「2. あまり困らない・悩まない」の2点との差の検定を行った結果、困ったり悩んだりする程度の平均値が2点よりも有意に高かった ($t(357)=22.57, p<.01$)。したがって、「価値観のずれ」は、多くの大学生がよく経験し、強くはないが少なからず悩んでいる問題状況であると解釈できる。そこで本研究では、「価値観のずれ」は多くの大学生に共通した悩みであると捉え、問題状況に含めることは妥当であると判断した。

一方、「性的な問題」は、困ったり悩んだりする程度が3点と有意な差がなく、経験率も50%以下であった。そこで「性的な問題」は大学生にとって

特に問題性の高い状況であるとは言えないと判断し、以降の分析では除外することとした。

以上より、大学生の恋愛における問題状況は、交際前3状況、交際中4状況、別れ・交際後3状況と特定された。

恋愛における問題状況の構造

恋愛における問題状況の全体的構造を検討するために、問題状況の尺度得点に対して、主成分分析を行った結果、3成分が抽出された。固有値はそれぞれ、成分1が4.87、成分2が1.14、成分3が0.85で、成分3までの累積寄与率は68.6%であった。成分1は、主成分負荷量がすべて正であったため、問題性の度合いを表す成分であると判断された。そこで、成分2の負荷量を横軸、成分3の負荷量を縦軸とした2次元平面上に主成分負荷量を布置した (Figure 1)。その結果、恋愛における問題状況は、大

Table 2 交際中の問題状況の因子分析結果 (主因子法, プロマックス回転)

	F1	F2	F3	F4	F5	平均	経験率 (%)
F1 関係継続に対する不安感 ($\alpha = .86$)							
26. 別れてしまうのではないかと, 不安になる	.77	-.05	.05	-.01	.05	3.55	72.60
18. 相手が自分のことをずっと好きでいてくれるか不安になる	.75	-.11	.10	-.06	.10	3.55	74.01
16. 相手が他の異性と何かあったらどうしようと不安になる	.73	.06	-.04	-.01	-.03	3.52	62.43
7. このまま無事に交際が続くか不安になる	.65	-.06	.03	.06	.05	3.61	78.25
21. 交際相手に会えないので, 相手がどうしているか不安になる	.60	-.01	.05	.04	.06	3.29	65.82
F2 相手の過干渉 ($\alpha = .79$)							
30. 他の人と遊んでいると, 交際相手が心配して, しつこくメールを送ってくる	-.05	.82	.05	-.03	.04	3.48	18.08
28. 相手に束縛される	-.08	.72	.04	-.08	.07	3.43	37.85
2. 自分が今日何をしてきたかを, 相手にしつこく聞かれる	.02	.62	-.07	.09	.04	3.10	32.20
23. 相手が日常生活の報告メールをしつこく送ってくる	-.07	.57	.10	-.08	.00	2.78	22.95
14. 相手が勝手に自分の携帯電話のメールや着信履歴を見る	.15	.44	-.11	.29	-.05	3.23	23.01
F3 性的な問題 ($\alpha = .79$)							
22. 自分と相手のセックスをしたいタイミングがずれる	.03	.00	.76	-.01	-.12	2.91	43.63
27. 自分と相手の性的嗜好性が異なる	-.06	.02	.76	.05	.01	2.94	22.79
17. 相手と性的な相性が合わない	.14	.10	.60	.02	-.09	3.08	20.17
10. 自分と相手の性欲の強さが異なる	.16	.19	.48	.00	-.08	3.11	56.09
6. 自分の性的なテクニックに自信がない	.09	-.10	.46	-.10	.15	3.02	41.76
F4 価値観のずれ ($\alpha = .81$)							
25. 相手と価値観が合わない	-.11	-.05	.01	.76	.08	3.34	52.82
4. 自分と相手の考え方が異なる	.09	.04	-.13	.72	-.07	3.00	86.44
8. 自分と相手の物事の理解の仕方が異なる	.28	.01	-.02	.68	-.15	3.03	81.30
20. 相手と趣味が合わない	-.14	-.09	.25	.56	.11	2.93	48.59
12. 自分と相手とでは, 面白いと感じる点異なる	-.17	-.03	.25	.41	.25	2.92	58.24
F5 相手への支援のできなさ ($\alpha = .82$)							
15. 相手が落ち込んでいる時に, うまく励ますことができない	-.01	.01	-.03	.02	.88	3.57	67.51
11. 相手が困っている時に, うまくアドバイスできない	.15	.08	-.15	.01	.66	3.58	70.90
29. 相手のことを精神的にうまく支えてあげることができない	.20	.06	.08	-.04	.61	3.60	56.09
因子間相関							
	F2	.21	—				
	F3	.56	.44	—			
	F4	.55	.45	.58	—		
	F5	.55	.36	.52	.43	—	

n=323

きく3つのまとまりを形成していた。第一・第四象限には「恋愛対象外の相手からのアプローチ」「相手の過干渉」「相手の未練行動」「別れの切り出し」の4つの問題状況のまとまりが見られた。これらは自分に対して好意を持っている相手からのネガティブな行動をうまく断るためにはどうしたらよいかについて悩む問題状況であると捉えられる。そこでこのまとまりを「相手からのネガティブな行動に関する問題状況」と解釈した。

る問題状況」と解釈した。

第三象限には「自分からのアプローチ」「ライバルの存在」「失恋」の3つの問題状況のまとまりが見られた。これらは自分が好意を持っている相手に自分のことを好きになってもらうにはどうしたらよいかについて悩む問題状況であると捉えられる。そこでこのまとまりを「自分からの積極的な働きかけに関する問題状況」と解釈した。

Table 3 別れ・交際後の問題状況の因子分析結果 (主因子法, プロマックス回転)

	F1	F2	F3	平均	経験率 (%)
F1 相手の未練行動 ($\alpha=.82$)					
7. 別れた後も, 相手がしつこくメールや電話をしてくる	.81	.06	-.14	3.56	30.23
8. 別れた後, 相手が自分の家に急に会いに来る	.75	.02	-.07	3.78	14.69
2. 別れたのに, 相手が交際中の時のように接してくる	.71	-.10	.05	3.17	35.59
10. 別れた後も, 相手がしつこく頼ってくる	.71	-.03	.11	3.33	24.36
12. 別れた後, 相手から「ヨリを戻したい」と連絡が来る	.43	.10	.11	3.37	39.20
F2 別れの切り出し ($\alpha=.85$)					
6. 別れた後に相手が引きずらないように, 別れるタイミングを考える	-.06	.92	-.06	3.26	41.53
9. 交際相手を傷つけないように, 別れを切り出す	-.02	.85	.00	3.63	58.19
13. 別れた後に相手と気まづくならないように, 別れを切り出す	.13	.65	.03	3.40	48.59
1. 交際相手に対する自分の気持ちが冷めたので, 別れを考える	-.04	.56	.08	3.11	66.10
4. 別れた後に相手から復縁を求められないように, 別れを切り出す	.17	.47	.16	3.06	24.93
F3 失恋 ($\alpha=.83$)					
15. 交際相手から別れ話を切り出された時に, どうやってあきらめるか考える	.00	-.10	.92	3.56	41.81
14. 交際相手から別れ話を切り出された時に, どうしたら関係を修復できるか考える	.03	-.03	.78	3.66	46.33
16. 交際相手から別れ話を切り出された時に, どうしたら友達に戻れるか考える	-.09	.17	.64	3.47	41.53
3. 交際相手から突然別れを切り出され, 連絡が取れなくなる	.03	.15	.51	3.73	21.19
因子間相関					
	F2	.60	—		
	F3	.41	.61	—	

n=332

Table 4 恋愛における問題状況の各下位尺度の記述統計量

	困ったり悩んだりする程度				経験率 (%)
	平均	(SD)	t 値	(df)	平均
交際前					
ライバルの存在	3.53	(0.95)	10.40**	347	48.97
恋愛対象外の相手からのアプローチ	3.32	(0.84)	7.22**	356	47.19
自分からのアプローチ	3.36	(0.78)	9.00**	385	70.63
交際中					
関係継続に対する不安感	3.51	(0.91)	10.84**	374	70.62
相手の過干渉	3.21	(0.98)	4.10**	346	26.82
性的な問題	3.02	(0.82)	0.45	340	36.89
価値観のずれ	3.07	(0.90)	1.50	357	65.48
相手への支援のできなさ	3.61	(0.89)	13.41**	382	64.84
別れ・交際後					
相手の未練行動	3.43	(0.93)	8.65**	344	28.82
別れの切り出し	3.27	(0.91)	5.65**	350	47.87
失恋	3.57	(1.02)	10.38**	344	37.71

** $p < .01$

第二象限には「関係継続に対する不安感」「相手への支援のできなさ」「価値観のずれ」の3つの問題状況のまとまりが見られた。これらは交際中に関係がうまくいっていないと感じる問題状況であると捉えられる。そこでこのまとまりを「関係の維持に関する問題状況」と解釈した。

このように、恋愛における問題状況は、好意を

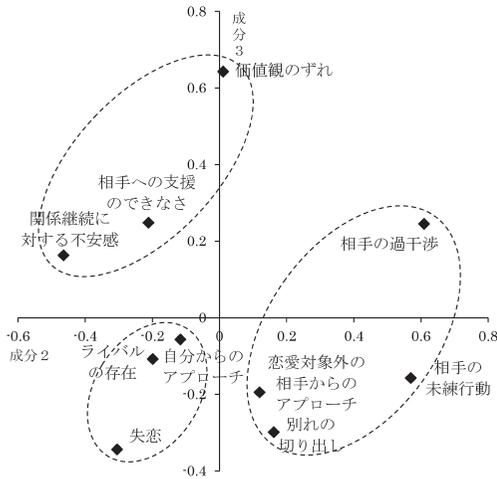


Figure 1 恋愛における問題状況の布置図

持っている主体が相手か自分か、もしくはそのどちらでもないかという観点で分類可能であることが示された。

恋愛における問題状況の性差

各下位尺度の中で経験ありと回答した項目の数をカウントし、経験数を算出した。恋愛における問題状況で困ったり悩んだりする程度と経験数の性差を検討するために、多変量分散分析を行った (Table 5)。ただし、交際中と別れ・交際後の問題状況の経験数については、交際経験のある回答者の結果のみを用いた。多変量検定の結果、困ったり悩んだりする程度 ($F(10, 275)=5.13, p<.01$), 交際前の問題状況における経験数 ($F(3, 447)=12.68, p<.01$), 交際中と別れ・交際後の問題状況における経験数 ($F(7, 321)=2.45, p<.05$) のいずれにおいても有意であったため、被験者間効果の検定を行った。その結果、「自分からのアプローチ」「相手への支援のできなさ」「別れの切り出し」以外の問題状況において、女性のほうが男性よりも有意に困ったり悩んだりする程度が高く、「恋愛対象外の相手からのアプローチ」と「関係継続に対する不安感」は、女性のほうが男性よりも有意に多く経験していた。

Table 5 男女別に見た恋愛における問題状況で困ったり悩んだりする程度と経験数の性差

	性別	困ったり悩んだりする程度				経験数			
		n	平均	(SD)	F 値 (df)	n	平均	(SD)	F 値 (df)
ライバルの存在	男性	127	3.31	(1.03)	11.80**	197	2.50	(1.54)	0.34
	女性	159	3.69	(0.84)	(1, 284)	254	2.41	(1.52)	(1, 449)
恋愛対象外の相手からのアプローチ	男性	127	3.02	(0.89)	32.30**	197	1.91	(1.57)	28.79**
	女性	159	3.56	(0.70)	(1, 284)	254	2.73	(1.64)	(1, 449)
自分からのアプローチ	男性	127	3.27	(0.95)	3.69	197	3.56	(1.56)	0.38
	女性	159	3.45	(0.64)	(1, 284)	254	3.47	(1.55)	(1, 449)
関係継続に対する不安感	男性	127	3.35	(0.96)	5.94*	139	3.26	(1.64)	7.31**
	女性	159	3.62	(0.85)	(1, 284)	190	3.75	(1.60)	(1, 327)
相手の過干渉	男性	127	3.05	(0.98)	7.34**	139	1.26	(1.47)	0.48
	女性	159	3.36	(0.97)	(1, 284)	190	1.38	(1.60)	(1, 327)
価値観のずれ	男性	127	2.90	(0.90)	8.24**	139	3.08	(1.57)	3.10
	女性	159	3.20	(0.88)	(1, 284)	190	3.38	(1.54)	(1, 327)
相手への支援のできなさ	男性	127	3.57	(0.97)	0.45	139	1.82	(1.17)	2.83
	女性	159	3.64	(0.84)	(1, 284)	190	2.03	(1.09)	(1, 327)
相手の未練行動	男性	127	3.23	(0.91)	19.60**	139	1.34	(1.59)	1.01
	女性	159	3.69	(0.84)	(1, 284)	190	1.52	(1.66)	(1, 327)
別れの切り出し	男性	127	3.24	(0.99)	2.38	139	2.17	(1.70)	3.67
	女性	159	3.40	(0.81)	(1, 284)	190	2.54	(1.75)	(1, 327)
失恋	男性	127	3.45	(1.03)	5.52*	139	1.58	(1.40)	1.27
	女性	159	3.72	(0.95)	(1, 284)	190	1.41	(1.35)	(1, 327)

** $p<.01$, * $p<.05$

Table 6 恋愛における問題状況で困ったり悩んだりする程度と交際人数との相関

	男性	女性
ライバルの存在	.01	.03
恋愛対象外の相手からのアプローチ	.01	-.07
自分からのアプローチ	-.16	-.19**
関係継続に対する不安感	.01	.22**
相手の過干渉	-.01	-.19*
価値観のずれ	.02	.02
相手への支援のできなさ	-.10	.06
相手の未練行動	.17	-.20**
別れの切り出し	-.21*	-.13
失恋	-.08	.10

** $p < .01$, * $p < .05$

恋愛における問題状況と交際人数との関連

恋愛における問題状況で困ったり悩んだりする程度と交際人数⁴⁾との相関係数を性別に算出した結果 (Table 6), 男女で異なる相関が見られた。男性では、「別れの切り出し」のみ有意な負の相関であった。女性では、「自分からのアプローチ」「相手の過干渉」「相手の未練行動」が有意な負の相関であり、「関係継続に対する不安感」が有意な正の相関であった。このように、女性のほうが、交際人数と相関のある問題状況が多く見られた。

考 察

本研究では、経験の有無と困ったり悩んだりする程度の2側面から大学生の恋愛における問題状況を特定し、その構造を検討した。さらに、恋愛における問題状況の性差や交際人数との関連を検討した。

まず、大学生の恋愛における問題状況の経験の有無と困ったり悩んだりする程度を検討した結果、交際前では「ライバルの存在」「恋愛対象外の相手からのアプローチ」「自分からのアプローチ」の3つ、交際中では「関係継続に対する不安感」「相手の過干渉」「相手への支援のできなさ」「価値観のずれ」の4つ、別れ・交際後では「相手の未練行動」「別れの切り出し」「失恋」の3つの問題状況において、困ったり悩んだりする程度が「やや困る・悩む」の

評定値よりも有意に高い、もしくは経験率が50%以上であった。したがって、これらの問題状況は、大学生にとって特に問題性の高い状況と特定された。また、これらの問題状況の信頼性係数は $\alpha = .73 \sim .86$ とおおむね十分な値が確認されたため、本研究によって、相羽 (2011) の内的信頼性の問題点は改善されたと言える。

相羽 (2011) の結果と比較すると、交際前の問題状況として「ライバルの存在」、交際中の問題状況として「価値観のずれ」、別れ・交際後の問題状況として「相手の未練行動」が新たに抽出された。

各問題状況における困ったり悩んだりする程度と経験率を見てみると、「相手への支援のできなさ」や「関係継続に対する不安感」は、困ったり悩んだりする程度も経験率も高く、大学生にとって特に問題性の高い状況であると考えられる。一方、「失恋」や新たに抽出された「ライバルの存在」は、困ったり悩んだりする程度は高かったが経験率は50%以下であったことから、経験する大学生は多くないものの悩みが深刻化しやすい状況であると考えられる。反対に、新たに抽出された「価値観のずれ」は、困ったり悩んだりする程度は高くないものの経験率が約65%と高かったことから、深刻ではないが多くの大学生に共通した悩みであると考えられる。このように、本研究では、困ったり悩んだりする程度だけでなく経験率についても検討したことで、大学生が持つ恋愛の悩みの実情についてより詳細に明らかにすることが可能となった。さらに、「価値観のずれ」のような、困ったり悩んだりする程度が中程度であっても多くの大学生が経験している問題状況についても掘り上げることが可能となり、大学生の実際の恋愛をより反映した問題状況を抽出することができたと考えられる。

ただし、別れ・交際後の問題状況は、交際前や交際中の問題状況と比較して、経験率が全般的に低かった。この理由として、以下の2点が考えられる。第1に、別れ・交際後では、別れを切り出す場合と切り出される場合とで経験する問題状況が相反するため、1度の別れで経験し得る問題状況が限定されることである。第2に、本研究の調査対象者が主に大学1~2年生で20歳未満が半数以上を占めていたために、交際経験が少なく、別れの経験数も少ない可能性が考えられる。年齢と共に交際経験や交

⁴⁾ 交際人数の度数分布と平均値 (SD) を算出した結果、「0人 (17.9%)」「1人 (16.5%)」「2~3人 (38.4%)」「4~5人 (16.5%)」「6人以上 (10.8%)」、平均値 (SD) = 1.86 (1.21) であった。分布に大きな偏りは見られなかったため、交際人数を連続変数として扱うことに問題は無いと判断した。

		好意の主体	
		自分	相手
		自分からの積極的な働きかけ	相手からのネガティブな行動
交際前	自分からのアプローチ ライバルの存在	関係の維持	恋愛対象外の相手からのアプローチ
交際中		関係継続に対する不安感 相手への支援のできなさ 価値観のずれ	相手の過干渉
別れ・交際後	失恋		別れの切り出し 相手の未練行動

Figure 2 恋愛における問題状況の構造的枠組み

際人数は増えるため(得能・佐藤, 2010; 国立社会保障・人口問題研究所, 2012), 高学年の大学生にも調査を行うことで, 別れ・交際後の問題状況の経験率が上昇すると考えられる。

次に, 本研究で特定された問題状況と相羽(2009)による雑誌やホームページの情報とを比較すると, 交際前の問題状況では, 雑誌やホームページで約65%と記述の多かったアプローチに関する問題状況を70%以上の大学生が経験しており, 困ったり悩んだりする程度も比較的高かった。一方, 交際中や別れ・交際後の問題状況は, 雑誌やホームページでは全体のうち13.3%と少なかったが, 本研究の結果, 多くの大学生が交際中や別れ・交際後にも, 関係継続に対する不安感や相手への支援のできなさ, 失恋など様々な悩みを抱えていることが明らかになった。また, 交際中の問題として, 雑誌やホームページでは性的な問題に関する記述が約半数を占めていたが, 本研究では, 性的な問題は経験率が37%と低く, 困ったり悩んだりする程度も高くなかったことから, 大学生にとって特に問題性の高い状況であるとは言えないと判断された。したがって, 交際中や別れ・交際後の問題状況は, 雑誌やホームページなどのメディアが提示する情報とは異なっていることが明らかになった。

本研究の第二の目的である恋愛における問題状況の構造を検討した結果, 問題状況は「自分からの積極的な働きかけに関する問題状況」「関係の維持に関する問題状況」「相手からのネガティブな行動に関する問題状況」の3つのまとまりに分類された。これらのまとまりは, 自分と相手のどちらが好意の程度が高いかという「好意の主体」によって分類さ

れたと解釈できる。そこで, 恋愛における問題状況の構造的枠組みをモデル化したものを Figure 2 に示す。以下では, 3つのまとまりごとに, 性差や交際人数との関連をふまえて, 問題状況の特徴を考察する。

第一のまとまりは, 「自分からの積極的な働きかけに関する問題状況」と解釈された。この問題状況は, 交際前と別れ・交際後に生じる問題状況であり, 自分のほうが相手よりも好意の程度が高い場合に生じると考えられる。この問題状況のうち, 特に交際前の「自分からのアプローチ」は雑誌やホームページなどのメディアで多く扱われていた問題状況である(相羽, 2009)。また, 研究蓄積の比較的多い「失恋」(飛田, 1998 など)は, 別れ・交際後の問題状況として唯一このまとまりに分類された。このように, 自分からの積極的な働きかけに関する問題状況は, これまでにメディアだけでなく実証的研究においても扱われてきた問題状況である。

性差の分析の結果, 経験数に性差は見られず, 告白などのアプローチは男性が多く経験しているという予測とは異なる結果となった。この理由として, 以下の2つの理由が考えられる。第一に, 伝統的性役割観の低下である。近年, 青年におけるジェンダー認識は変化し, 伝統的な性別ステレオタイプや性役割を支持する傾向が減少していることが指摘されている(湯川・廣岡, 2003)。したがって, 告白やデートの誘いといったアプローチは男性からするものという認識が薄れてきたことにより, 経験率に性差が見られなかったと考えられる。第二に, 本研究では, 単なるアプローチの経験ではなく, アプローチする時に困ったり悩んだりした経験を尋ねていた。したがって, どのようにアプローチしたらよいかについて, 男性だけでなく女性も悩んだ経験があることを示した結果であると考えられる。

また, ライバルの存在と失恋では, 男性よりも女性のほうが困ったり悩んだりする程度が高かった。したがって, 失恋に関しては先行研究(Smith & Cohen, 1993)と同様の結果が得られた。ライバルの存在については, 特に青年期の女性は男性よりも同性の友人関係が固定的・閉鎖的であり, 関係性を重視する傾向にあるため(落合・佐藤, 1996; 西村・長野, 2008), 女性は自分にとってライバルである同性友人との関係性について懸念しやすく, 恋愛感情

と友情のジレンマで悩みやすいと考えられる。

次に、第二のまとまりである「関係の維持に関する問題状況」は、実際中のみ生じる問題状況であり、自分と相手の好意のバランスが実際に崩れているかどうかに関わらず、崩れているように感じる場合に生じると考えられる。この問題状況は、困ったり悩んだりする程度や経験率が特に高かったことから、大学生が日常的に悩みやすい問題状況であると考えられる。特に、これらの問題状況のうち、「関係継続に対する不安感」は、関係不安(高坂, 2009)や親和不満感情(立脇, 2005)と類似した概念である。立脇(2005)では、40%以上の大学生が親和不満感情の1つである「不安」を感じており、本研究においても経験率が70%を超えていたことから、「関係継続に対する不安感」は青年期の恋愛に特徴的な悩みであると言えよう。この問題状況は、先行研究(高坂, 2009; 立脇, 2005; 相羽, 2011)からの推測どおり、女性のほうが男性よりも多く経験しており、困ったり悩んだりする程度も高かった。また、女性は交際人数が多いほど困ったり悩んだりする程度が高かったことから、他の問題状況とは異なり、交際経験を積んでも不安感が解消されないだけでなく、むしろ増加してしまう可能性があることが示された。この点に関して、高坂(2009)は、男性は交際期間が長くなるほど関係不安が減少するが、女性は交際期間が長くなっても減少せず、交際期間が長くなるほど男性よりも関係不安が強くなることを明らかにしている。本研究の結果と合わせて考えると、女性は交際期間や交際経験といった恋人との関わりが増えるほど、相手に対する不安感が強くなると捉えられる。この理由として、女性は男性よりも恋愛至上主義傾向や愛情希求(「いつも私のことだけを考えてほしい」などの相手に対する無条件的な愛情を求める傾向)が強いため(Hill, Rubin, & Peplau, 1976; 伊福・徳田, 2006)、別れを繰り返すたびに、また愛情希求が満たされない状態になるかもしれないという不安感が強くなっていってしまうと考えられる。

第三のまとまりは、「相手からのネガティブな行動に関する問題状況」と解釈された。この問題状況は、すべての関係段階で生じる問題状況であり、相手のほうが自分よりも好意の程度が高い場合に生じると考えられる。この問題状況は、経験率が他の2

つの問題状況のまとまりよりも比較的低いものの、「相手の過干渉」はデートDV、「恋愛対象外の相手からのアプローチ」や「相手の未練行動」はストーカーといったように、深刻な社会問題に繋がりのある問題状況で構成されている。これらの社会問題は、女性が経験しやすいことが指摘されている(内閣府男女共同参画局, 2008)が、本研究においても、特に女性が経験しやすい問題状況であることが明らかになった。また、女性は「相手の過干渉」と「相手の未練行動」において交際人数と負の相関が見られたため、女性は交際経験を積むことで、デートDVやストーカーなどの社会問題に繋がりのある状況に対処する方法を学び、問題の深刻化を防ぐことができる可能性が示唆された。一方、男性はすべての問題状況の中で唯一「別れの切り出し」においてのみ、交際人数と負の相関が見られた。換言すると、男性は「別れの切り出し」以外の問題状況では、交際経験を積んでも困ったり悩んだりする程度が低減しないということである。これは、男性は女性に比べて同性の友人と自身の恋愛について話すことが少ない(Caldwell & Peplau, 1982)ためであると考えられる。すなわち、女性は同性の友人と恋愛の話を経験的によくするため、自身の恋愛の話題について友人と共有することで効率的に解決策を学び、困ったり悩んだりする程度を低減させていくことが可能であると推察される。一方、男性は自身の恋愛の悩みを友人に相談することが少ないため、交際人数が増えても悩みの低減には繋がらず、問題状況に直面するたびに一人で悩むのではないかと考えられる。

以上のように、恋愛における問題状況は、「好意の主体」が自分と相手のどちらにあるかという視点によって、3つのまとまりに分類できることが明らかになった。

本研究の結論と今後の課題

本研究は、日本の大学生の恋愛における問題状況を交際前から別れ・交際後まで幅広く検討したことによって、恋愛における問題状況を特定した。そして、恋愛における問題状況の構造的枠組みを構築したことで、これまで個々に検討されてきた恋愛関係のネガティブな事象の位置づけを明確にした。さらに、学術的に検討されてきた問題状況だけでなく、大学生が日常的に持つ恋愛関係での些細な悩みから、デートDVやストーカーなどの社会問題まで、

恋愛関係で生じる様々な問題状況を一つの枠組みで説明することが可能となった。今後、この枠組みを利用することで、大学生が恋愛で悩みを抱えた際に、問題を整理し解決策を考えるための一助となる可能性が期待できる。

また、メディアの提示する情報と現実の青年のデータを比較したことで、交際中や別れ・交際後の問題状況に関して、メディアの情報が現実を反映していないことを明らかにした。近年、スマートフォンの普及に伴い、以前にも増して恋愛に関する情報を手軽に入手することが可能になっている。したがって、恋愛に興味関心の高い青年がメディアの提示する科学的根拠のない情報を鵜呑みにせず、その根拠を吟味するリテラシーがますます求められると考えられる。本研究の結果は、このようなメディアリテラシー教育において、科学的説得力を持った基礎データとして活用できると考えられる。

今後の課題として、以下の2点があげられる。第一に、本研究で構築されたモデルは、交際前、交際中、別れ・交際後の関係段階のプロセスを連続的に分析したモデルではないため、今後は関係段階を踏まえた問題状況の移行プロセスについても検討していく必要がある。第二に、本研究で作成された枠組みをもとに、恋愛における問題状況で困ったり悩んだりする程度を規定する要因を明らかにすることも重要である。本研究では、恋愛における問題状況の関連変数としてこれまでの交際人数を扱ったが、交際経験が増えることで困ったり悩んだりする程度が低減するのか、逆に困ったり悩んだりする程度が低いために交際経験が増えるのかは明らかでない。また、関係の維持に関する問題状況において、好意のバランスが崩れているように感じる場合に生じた点についても本研究では推測にとどまっている。したがって、縦断的にデータを収集したりペアデータによるカップル間の好意度や関係満足度を測定したりすることで、恋愛の悩みの規定因や悩みの解決策を明らかにすることが可能となるであろう。

引用文献

- 相羽美幸 2009 日本の雑誌・ホームページにおける恋愛スキルに関わる記述の内容分析 読書科学, 52, 38-48.
相羽美幸 2011 大学生の恋愛における問題状況の特徴

- 青年心理学研究, 23, 19-35.
Buss, D. M., Larsen, R. J., Westen, D., & Semmelroth, J. 1992 Sex differences in jealousy: Evolution, physiology, and psychology. *Psychological Science*, 3, 251-255.
Caldwell, A., & Peplau, A. 1982 Sex differences in same-sex friendship. *Sex Roles*, 8, 721-732.
大坊郁夫 1990 対人関係における親密さの表現—コミュニケーションに見る発展と崩壊— 心理学評論, 33, 322-352.
Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society*. New York: W. W. Norton.
飛田 操 1998 愛の崩壊 松井 豊 (編) 恋愛の心理学—データはどこまで恋愛を解明したか— 至文堂 pp. 122-130.
Hill, C. T., Rubin, Z., & Peplau, L. A. 1976 Breakups before marriage: The end of 103 affairs. *Journal of Social Issues*, 32, 147-168.
堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル実験社会心理学研究, 34, 116-128.
伊福麻希・徳田智代 2006 恋愛依存傾向尺度作成の試み—男女間における恋愛依存傾向の比較— 久留米大学心理学研究, 5, 157-162.
石川英夫 1994 大学生の恋愛観 東京経済大学人文自然科学論集, 98, 53-79.
石本奈都美・今川民雄 2001 青年期における失恋後の立ち直り過程 対人社会心理学研究, 1, 119-132.
石本奈都美・今川民雄 2003 青年期における恋愛関係崩壊による心理的变化に影響する要因について 対人社会心理学研究, 3, 39-45.
神蘭紀幸 1998 恋愛によって人は成長できるか—恋愛中の精神的健康と自己評価の様相— 松井 豊 (編) 恋愛の心理学—データはどこまで恋愛を解明したか— 至文堂 pp. 215-224.
加藤 司 2005 失恋ストレスコーピングと精神的健康との関連性の検証 社会心理学研究, 20, 171-180.
国立社会保障・人口問題研究所 2012 平成22年第14回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)第II報告書 わが国独身層の結婚観と家族観 国立社会保障・人口問題研究所
高坂康雅 2009 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と、交際期間、関係認知との関連 パーソナリティ研究, 17, 144-156.
牧野幸志 2012 青年期における恋愛と性行動に関する研究(3)—大学生の浮気経験と浮気行動— 経営情報研究, 19, 19-36.
牧野幸志・井原諒子 2004 恋愛関係における別れに関する研究(1)—別れの主導権と別れの季節の探求— 高松大学紀要, 41, 87-105.
内閣府男女共同参画局 2008 女性に対する暴力に関するシンポジウム報告書 内閣府男女共同参画局
西村麻希・長野恵子 2008 現代青年の友人関係と対人

- ストレスに関する研究 西九州大学健康福祉学部
紀要, **39**, 65-71.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつ
きあい方の発達の变化 教育心理学研究, **44**, 55-
65.
- Pines, A. M., & Friedman, A. 1998 Gender differences in
romantic jealousy. *Journal of Social Psychology*, **138**, 54-
71.
- Smith, H. S., & Cohen, L. H. 1993 Self-complexity and reac-
tions to a relationship breakup. *Journal of Social and
Clinical Psychology*, **12**, 367-384.
- 高比良美詠子 1998 対人・達成領域別ライフイベント
尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心
理学研究, **14**, 12-24.
- 谷本奈穂 1998 現代的恋愛の諸相—雑誌の言説におけ
る社会的物語— 社会学評論, **49**, 286-301.
- 立脇洋介 2005 異性交際中の出来事によって生じる否
定的感情 社会心理学研究, **21**, 21-31.
- 立脇洋介・松井 豊・比嘉さやか 2005 日本における
恋愛研究の動向 筑波大学心理学研究, **29**, 71-87.
- 得能真理香・佐藤有耕 2010 青年期の異性交際の特徴
と異性交際による友人関係の変化 日本教育心理
学会第 52 回総会発表論文集, 306.
- 坪田雄二 1998 嫉妬感情 松井 豊 (編) 恋愛の心理
学—データはどこまで恋愛を解明したか— 至文
堂 pp. 131-140.
- 山下倫実・坂田桐子 2008 大学生におけるソーシャ
ル・サポートと恋愛関係崩壊からの立ち直りとの
関連 教育心理学研究, **56**, 57-71.
- 湯川隆子・廣岡秀一 2003 大学生におけるジェンダー
特性語の認知 (2)—性分類反応からみた 1970 年代
と 1990 年代の比較— 三重大学教育学部研究紀要
(人文・社会科学), **54**, 117-123.

(受稿: 2015.8.18; 受理: 2016.4.11)
